

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第3回 「竺園寺の歴史」

今回は坐禅会の池田さんからのリクエストで竺園寺の歴史、由来を語っていただきました。

当寺は南北朝の時代 14 世紀中頃に市川市の堀之内に城を築いていた石井氏(注 1)が居城の近くにお堂を建てたのが初めて、後の 15 世紀に鎌倉の竹園山宝泉寺から喜州和尚を招きその山号「竹園」から「石井山竺園寺」と称することとなったそうです。このとき招来した十一面観音様をご本尊として、南北朝の戦乱で命を落とした一族、家臣の菩提を弔われたようです。観音様は鎌倉時代後期の作で、さらに瓦に焼いた千手観音菩薩が胎内仏として納められていることが近年の調査(注 2)で確認されたそうです。十一面観音様は、六道のうち阿修羅界(注 3)の救い主とのことです。石井家にはお城が落城した際に非業の最期を遂げた姫君や、近くの池(じゅんさい池と考えられている。)に入水された奥方の話が伝えられており、堀之内に残る石井家にいまも姫宮として祭られているそうです。(現在のご本尊様は釈迦如来様でお像は江戸時代の作。)

当寺境内には宇賀神様(顔は人、身体はとぐろを巻いたお像)とお稲荷様が、対をなすように祭られています。宇賀神様は、堀之内に残る弁天様のお使いとかで、石井家と当寺の長い繋がりを現しています。また弁天様も宇賀神様も、さらに十一面観音様も、水との関係が深く、戦乱の世に刀を捨て鋤をとることを選んだ石井一族の平和と豊穰への祈りのしるしが現されています。因みに、この宇賀神様とお稲荷様のセットは、近隣の旧家にはよくみられ、珍しいそうです。和尚様は 18 代目とのことですが、江戸期から明治のはじめにかけ、寺の経営は難しく近隣の大寺に留守を頼むこともあったようですが、国分地域の発展にあわせて落ち着かされてきたとのことです。また明治時代には、国府台にあった陸軍演習場の関係で軍馬の供養埋葬を掌ったことから、現在の動物の供養埋葬を行うことになったそうです。

以 上

お寺では、梅、躑躅、蓮、牡丹や半夏生など季節ごとに手入れされた草花、樹木が庭を飾ります。それらがときに華やぎ、ときに儂げなもの、お話にあったお姫様や一族戦士やその家族のこめられた想いの所為でしょうか。コロナとの戦いで疲れた一日、お参りに、癒やされに、訪れるのは如何ですか。1月の末は梅の花が綻び始めます。(メパ-感想、以下注も)

(注 1) 石井氏は、千葉氏(平安時代に国司に任ぜられ、広くこの地域を領した。)の一族で千葉六党の国分氏の支族。喜州和尚の出自である千葉東家も一党。お寺の推測では石井家の落城は、16世紀の国府台合戦(二度にわたる北条氏との戦い)の折では、とされています。石井家のご子孫は、現在も堀之内にお住まいの他、近隣には多くの石井姓の方がいらっしゃいます。また、和尚様が最近、佐賀県に行かれた際に、元寇の役の後も三度の蒙古来襲に備えるべく幕府の命で同地に残ることになった千葉氏の縁で、石井姓の方が多いのにことに気付かされたとのこと。

(注 2) 竺園寺の由来および十一面観音像についてお寺でパンフレットが入手できるほか、大学との共同調査による十一面観音像およびお寺の建築構造などの調査が以前に出版されています。

(注 3)阿修羅は、奈良興福寺の阿修羅像が有名ですが、手元の仏教後小辞典をひくと「その歴史は複雑でもとは古代ペルシャの最高神アフラ・マズダと同じ」とあり、古代インドでは「神ならざる者」とされたが、仏教では護法神」とありますが、その一方で、六道のうちの「闘いを好む者」ともされています。お寺のパンフレットに、「競争社会・格差社会の救い主として、ますます十一面観音様への信仰は私たちの心を安寧へと導いてくださる・・・」とあります。好む好まないに拘わらず、競争・格差それに異常気象、コロナと格闘を迫られる現代の「修羅場」にいる者にとって、信仰は科学と同じくらい必要と思いますが・・・。文責 中村

竺園寺坐禅会 寺子屋プロジェクト

2021年1月30日

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第3回 「竺園寺の歴史」

今回は坐禅会の池田さんからのリクエストで竺園寺の歴史、由来を語っていただきました。

当寺は南北朝の時代14世紀中頃に市川市の堀之内に城を築いていた石井氏(注1)が居城の近くにお堂を建てたのが初めて、後の15世紀に鎌倉の竹園山宝泉寺から喜州和尚を招きその山号「竹園」から「石井山竺園寺」と称することとなったそうです。このとき招来した十一面観音様をご本尊として、南北朝の戦乱で命を落とした一族、家臣の菩提を弔われたようです。観音様は鎌倉時代後期の作で、さらに瓦に焼いた千手観音菩薩が胎内仏として納められていることが近年の調査(注2)で確認されたそうです。十一面観音様は、六道のうち阿修羅界(注3)の救い主とのこと。石井家にはお城が落城した際に非業の最期を遂げた姫君

や、近くの池(じゅんさい池と考えられている。)に入水された奥方の話が伝えられており、堀之内に残る石井家にいまも姫宮として祭られているそうです。(現在のご本尊様は釈迦如来様でお像は江戸時代の作。)

当寺境内には宇賀神様(顔は人、身体はとぐろを巻いたお像)とお稲荷様が、対をなすように祭られています。宇賀神様は、堀之内に残る弁天様のお使いとかで、石井家と当寺の長い繋がりを現しています。また弁天様も宇賀神様も、さらに十一面観音様も、水との関係が深く、戦乱の世に刀を捨て鋤をとることを選んだ石井一族の平和と豊穡への祈りのしるしが現されています。因みに、この宇賀神様とお稲荷様のセットは、近隣の旧家にはよくみられ、珍しくないそうです。和尚様は18代目とのことですが、江戸期から明治のはじめにかけ、寺の経営は難しく近隣の大寺に留守を頼むこともあったようですが、国分地域の発展にあわせて落ち着かれてきたとのこと。また明治時代には、国府台にあった陸軍演習場の関係で軍馬の供養埋葬を掌ったことから、現在の動物の供養埋葬を行うことになったそうです。

以 上

お寺では、梅、躑躅、蓮、牡丹や半夏生など季節ごとに手入れされた草花、樹木が庭を飾ります。それらがときに華やぎ、ときに儂げなもの、お話にあったお姫様や一族戦士やその家族のこめられた想いの所為でしょうか。コロナとの戦いで疲れた一日、お参りに、癒やされに、訪れるのは如何ですか。1月の末は梅の花が綻び始めます。(メンバー感想、以下注も)

(注1) 石井氏は、千葉氏(平安時代に国司に任ぜられ、広くこの地域を領した。)の一族で千葉六党の国分氏の支族。喜州和尚の出自である千葉東家も一党。お寺の推測では石井家の落城は、16世紀の国府台合戦(二度にわたる北条氏との戦い)の折では、とされています。石井家のご子孫は、現在も堀之内にお住まいの他、近隣には多くの石井姓の方がいらっしゃいます。また、和尚様が最近、佐賀県に行かれた際に、元寇の役の後も三度の蒙古来襲に備えるべく幕府の命で同地に残ることになった千葉氏の縁で、石井姓の方が多いのことに気付かされたとのこと。

(注2) 竺園寺の由来および十一面観音像についてお寺でパンフレットが入手できるほか、大学との共同調査による十一面観音像およびお寺の建築構造などの調査が以前に出版されています。

(注3)阿修羅は、奈良興福寺の阿修羅像が有名ですが、手元の仏教後小辞典をひくと「その歴史は複雑でもとは古代ペルシャの最高神アフラ・マズダと同じ」とあり、古代インドでは「神ならざる者」とされたが、仏教では護法神」とありますが、その一方で、六道のうちの「闘いを好む者」ともされています。お寺のパンフレットに、「競争社会・格差社会の救い主として、ますます十一面観音様への信仰は私たちの心を安寧へと導いてくださる・・・」とあります。好む好まないに拘わらず、競争・格差それに異常気象、コロナと格闘を迫られる現代の「修羅場」にいる者にとって、信仰は科学と同じくらい必要と思いますが・・・。文責 中村